

むかし、あるところに、心のやさしい娘がいました。

あるとき、娘は、川のそばで、蛇が蟹を飲みこもうとしているのを見つけました。娘は蛇に、

「おまえ、そんなかわいそうなことをするな。生きているものが、お互いに、食うたり食われたりするのはいけな。放してやれ。わたしがおまえの嫁さんになってやるから」といいました。

蛇は蟹を放して、すうつと行ってしまいました。娘は、

「ああ、よかった」と思って、家に帰りました。

それからしばらく経った満月の晩のこと。娘の家の戸をたたく者がありました。父親が出てみると、こうこうと照る月明かりの中に、このあたりでは見かけない美しい若者が立っていました。若者は、

「ごめんください。お宅に、娘さんがおるはずだが」といいました。

「ああ、娘はいるが何の用だ」と父親がたずねると、若者はいいました。

「このあいだ、わたしが、川のそばで、蟹をつかまえて食おうかと思っていたら、娘さんが、『嫁になってやるから蟹を放してやれ』といったので、放してやったのだ。約束どおり娘さんをお願いに来た」

父親はおどろいて、

「なんとしたことだ。娘と相談して返事をするから、今日のところは帰ってくれ」といいました。若者は、

「それなら、つぎの満月の晩にまた来よう」といって、帰って行きました。

父親は、あわてて娘に、

「おまえ、いったいどうしたことだ」と、わけを聞きました。娘は、

「このあいだ、川のそばで、蛇が蟹を飲もうとしていたから、『嫁になってやるから蟹を放してやれ』といったんです。すると、蛇は蟹をぶつと放してどこかへ行きました。まさかうちに来ようとは思わなかった」といいました。

ふたりが、どうしたものかと思案に暮れているうちに、ひと月たつて、つぎの満月の晩がやって来ました。娘は、父親にいいました。

「おとうさん。約束をしたんだから、わたしは蛇の嫁になります。今晚蛇が来たら、一週間待ってくれるようにいってください。そして、お父さんは、その一週間のあいだに、ひのき造りの一間四方の祠ほらを建ててください。わたしは、その祠の中に入って、蛇が迎えに来るのを待ちます」

真夜中、だれかが家の戸をたたきました。父親が出てみると、このあいだの若者が立っていました。若者は、返事をきかせてくれといいました。父親は、

「わかった。娘を嫁にやろう。だが、一週間待ってくれ。新しい家を建てて、花嫁衣装を着せて娘を待たせておくから、一週間したら迎えに来てくれ」といいました。

若者は満足そうに帰って行きました。

つぎの日から父親は、大工を頼んで、ひのきの祠を建てはじめました。

一週間たって、祠ができると、父親は、家宝の観音さまを娘に渡し、

「おまえのお守りに、持っているといい」といいました。

晩になると、娘は美しい衣装を着て、観音さまを持って、ひのきの祠に入りました。そして、戸をきつちり閉めて、お経を唱えて観音さまをおがんでいました。

真夜中になると、祠が、メシ、メシ、メシメシと音をたてはじめました。蛇が、祠を七巻半もとりまいて、しめつけていたのです。音はどんどん大きくなっていき、祠はこわれそうでした。娘は、ひたすらお経を唱え続けました。

しばらくすると、どこからか、ガザ、ガザ、ガザガザという音が聞こえ始めました。すると、しめつける音が少し小さくなりました。ガザガザという音はだんだん小さくなり、しめつける音はどんどん小さくなっていきました。しまいに、メシメシという音はしなくなり、ガザガザという音だけが聞こえました。娘は一心にお経を唱え続けました。しばらくすると、ガザガザという音もぴたりとやみました。

やがて、夜が明けたので、娘は恐る恐る外へ出てみました。祠のまわりには、たくさんの蟹が死んでいて、大きなヘビが蟹に食い殺されていました。

娘は、祠に観音さまをまつてあま尼になり、蟹の供養くようをしたということです。

今は、その祠は、蟹満寺とよばれています。

おしまい

原話：『出雲の昔話』立石憲利・山根芙佐恵編／日本放送出版協会

再話：村上郁